

令和3年度
入学試験問題

第2回

国語

- 1 問題用紙は監督者^{かんとくしゃ}の指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点^{くとうてん}や符号^{ふごう}は一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから17ページまであります。

受験 番号		氏 名	
----------	--	------------	--

森村学園中等部

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1 二〇世紀も終わりの頃ころになって、科学者たちは生態系の物質の動きにサケがどうかかわっているかということ調べて、^①思いがけないようなことを明らかにしました。

サケは、中には一〇キログラムにもなるものがあるほど大きな魚で、I 数もたくさんいます。サケの豊かな川では川の水が盛り上がるほどになるとか、サケの群れに棒を立てても倒たおれないほどだとか言われるほどです。「物質の流れ」という点から見ると、サケは肉というタンパク質や骨というカルシウムなどがたくさんつまったカプセルと見ることが出来ます。そのカプセルには海の物質がたくさん含まれていきます。研究者たちが調べたところ、一匹いっぴきのサケになんと一三〇グラムの窒素ちっそと二〇グラムのリンが含まれていたそうです。

引力の法則で水は上から下に、つまり川の上流から下流に流れます。そして海にたまり、海から蒸発した水蒸気すいてきが水滴となり、雨としてまた山に戻もどって川を流れ下ります。こうして地球上の水は循環じゅんかんします。II、たとえば塩分は水と違ちがって空に上がることがないので、海にたまりつづけ、そのため、海は塩辛しおからいのです。多くの物質はそうして海にたまります。

さて、「海の物質のカプセル」であるサケは、引力の法則に逆さからって川を遡さかのぼります。その結果、大量の海の物質が上流にもたらされます。研究者たちの試算によると、アラスカの川には、長さ二五〇メートルあたり、一ヶ月に八〇キログラムの窒素と一一キログラムのリンがサケによって供給されるそうです。

その結果、どういうことが起きるか。サケがのぼってくる川にはたくさんヒグマが集まってきます。ヒグマは越冬えつとうのために脂肪しぼうを蓄たくわえなといけないので、秋にはものすごい食欲です。ある調査によれば一頭のヒグマは一シーズンに六〇〇匹以上のサケを食べるそうです。ヒグマは川から離はなれた森に行つてゆつくりサケを食べますが、たいていは半分くらい食べてまた川に戻かえって次のサケを狙ねらいます。食べ残しはカラスやコヨーテなどほかの動物の餌えさになります。

クマに食べられずに産卵を終えたサケは死にますが、その死骸しがいは鳥や魚やエビなどの餌になり、腐くされば菌類きんるいや微生物びせいぶつを育てます。こうして川は豊富な海の窒素で満たされ、やがて孵かえったサケの稚魚ちぎよにとっても豊富な栄養となります。III サケの親は自分の体を提供する

ことで、ほかの動物だけでなく、自分の子供の栄養にもなっているのです。

サケを食べたヒグマはもちろん森で糞ふんをしますから、その時期の森の中はクマの糞だらけでとてもくさいといえます。その結果、森林の木は育ちがよいそうです。サケののぼる川とのぼらない川で周囲の木の育ちを調べたら、サケののぼるほうが三倍も生長がよく、また、同じサケののぼる川でも川に近い木ほど生長がよかったという調査結果があります。それによると、木の中の窒素のうち実に四〇パーセントが海からもたらされたものだったそうです。

②「サケが森林を育てる」と言われても、聞いただけでは何のことかわかりませんが、自然のしくみを理解するうえではたいへん含蓄の深いことばです。森はたくさん命を育みますが、その森を豊かにするのがクマの糞で、そのクマの食料になるのがサケなのだということです。

また、さらに考えてみると、そのサケを育てているのは海のプランクトンであり、サケの旅を可能にしているのは川の存在です。つまり、サケだけでなく海や川までが一緒になって初めて、森が育つということがわかります。サケはこの生態系の中で大きな役割を担っているのです。

③A かりに、地球と同じような星があり、水も生物も存在するとしましょう。その星でも、物理法則にしたがって、水は山から海に流れ、蒸発して循環します。植物は光合成をし、動物が植物を食べます。ただ、その星にはサケだけはいないとします。すると海の水分は循環しても、そのほかの物質は地球のように川を遡ることはないということになります。そう考えるとサケの一生は、サケという魚そのものにとってもド
③B ラマチックですが、地球の生態系にとってもたいへんに奇跡的なのだということがわかります。

③C サケとクマと森林の研究をしているレイムチェン博士は、「私たちの研究で、それまで知られていなかった海と森のリンクが明らかになったが、それは森林生態系の理解にも重要である」と書いています。このことばからは、研究者として未知のこと、それも海と森という地球上の大きな生態系がつながっていたことを発見したことに對する誇らしさが伝わってきます。(中略)

③ 自然に向き合う姿勢について、私は以前からアイヌの物語などに関心を持っていました。童話や民話という形で表現されているので、はつきりとは書いてはありませんが、アイヌの人々が、動植物を自分たちと同じように見たり、自然に畏れや敬意、いたわりをもっていることが伝わってくるものが多いのです。

最近になって『アイヌ語の贈り物』という本が出ました。(中略)

この本の中で、私はアイヌの地名表現について書いた箇所が目がとまりました。アイヌの人々は生き物の命をたいせつにしたいだけでなく、土地もまた生き物であると考えていた、ということが述べられています。たとえば川の本流と支流のことをそれぞれ「ポロ・ペツ(親の川)」と「ポン・ペツ(子供の川)」と言ったり、川にも年齢があるかのように「オンネ・ナイ(年とった沢)」、「ライ・ペツ(死んだ川)」と言ったりするそうです。

そうした表現の中には、私たちには奇妙に思えるものがあります。急流のことを「リコマン・ペツ(高いところに入っていく川)」と言うそうですし、水源のことを「ペツ・エトウ(川に行く先)」、河口を「ペツ・プツ(川の入り口)」と言うのだそうです。川は上から下に降りるものですから、これでは逆に川が海から山にのぼって行くかのようなのです。けれども、このことは

X

考えれば納得できます。

私は思いました。最新の生態学によって説明されたことを、アイヌの人たちははるか昔から知っていたのではないだろうか。自然を理解するには、地形をたんなる無機物質の起伏と見るのではなく、命あるものとみなし、また、川を水が上から下に降りる管のように見るのでは

なく、親子のようにつながり、生まれては死んでゆく生き物ととらえる。そこは海からのぼってくるサケが生きてくる場所であり、サケは周りの生き物を生かし、森を豊かにする——そのことをアイヌの人たちはごく自然にわかっていたのではないかと思うのです。(中略)

④ 私たちはアイヌの社会、文化、歴史などをほとんど学ぶ機会を与えられていません。私も不勉強ですが、はっきりしているのは明治政府が北海道を開発する過程でさまざまな形でアイヌの生活を奪って来たということです。たくさんの不正義と差別がありました。世界的にみれば、ヨーロッパ文明による、たとえばアメリカ、アフリカ、アジアへの侵入によるものと同じ図式です。そこにはつねに不正義と蔑視、それに基づく横暴と暴力がありました。

ここでは政治や戦争については触れないで、自然についての態度を考えたいと思います。ヨーロッパのキリスト教世界は人間を神の姿をした最高の被造物とし、地上の動植物を支配する責任があると考えました。そうした文化の中で、自然から人間に役に立つ物を見つけ出して利用することを「開発」と呼び、よいことだと考えました。高い山に登ることを「征服」と呼び、宇宙に行くことを「ミッション(使命)」と呼ぶことから、その精神が読み取れます。また、自分たちの文化を一番と考え、アジアやアフリカ、アメリカなどを低くみていました。地元の人たちになじみのある山や湖などを見つけると、「人類の発見」と言い、勝手に名前をつけたことも、その表れでしょう。エベレスト山も、ビクトリア湖もそうした名前の例です。

近代以降のヨーロッパの人々は、他文化の人々が持つ、自然に対する異なった考えを、迷信であるとして切り捨てました。たしかに迷信があったことは事実で、たとえば、日食の原理を知らない社会の人々は世界の終わりが来たと恐れおののきましたが、ヨーロッパ人はそれを自然の原理を理解しない愚かな態度だと断定しました。人類史の中でヨーロッパの文明と文化の果たした役割はきわめて大きなものがあり、私たちもその恩恵にあずかっています。その科学的な姿勢は高く評価されますが、一方で、自然に対する姿勢という面では他の多くの文化より傲慢な面があると感じます。

二〇世紀の後半になって、人口が増え、環境問題が発生し、資源やエネルギーの枯渇が大きな問題となってきました。⑤ 地球が有限であることに人類が初めて気づいたのです。人口が増え続け、物資やエネルギーを浪費し続けられれば、限界があるということがまぎれもない事実であることがわかりました。

そうした動きの中で、地球を我が物顔で支配するような態度はまちがっているのではないかということに気づいたのがレイチェル・カーソンでした。その叡智は世界を変えるほどの影響力を持っていました。もちろんカーソンが突然現れて、何もなかったところからそういう認識に到達したわけではありません。多くの先人が研究して積み上げてきた学問や、思索によって深められた哲学を彼女が学んで到達したのです。

ところが、そうした欧米の文化の到達点とも言えるすばらしい自然観は、⑥ 皮肉なことに欧米人に蔑視されてきた少数民族が当たり前前持っていたものでした。アイヌの人々にとって、世界は人間だけのためにあるのではないというのは、当然すぎるほど当然のことでした。先にあ

げたカムイのことばの中に、欲張って山菜をとり尽くすことだけでなく、家に持ち帰って腐らせることを戒めることばがあります。これは食べられないほどの食料を買い、食べ物を大量に廃棄している私たちの生活への警告と読むことができます。食べ物はわかりやすい例ですが、もちろんそれだけではありません。熱帯林の樹木を大量に輸入していること、中近東から膨大な量の原油を輸入していることもまったく同じことです。

大和民族は欧米のようになることを「近代化」とする一方で、アイヌ文化を無視するどころか蔑視してきました。アイヌ文化を法的に認めたいのはなんと明治維新から約一二〇年も経った一九九七年のことなのです。

それにしても、自分たちの国に古くから住む人たちに学んでいれば、日本列島の自然にこれほど迷惑をかけなくてもすんだと思うと、複雑な気持ちになります。私たちはアイヌ文化に流れる自然観を謙虚に学ぶべきだと思います。

(高槻成紀『動物を守りたい君へ』より)

※ 問題作成の都合上、原文の表記を一部改めたり、文章の一部を省略したりしたところがあります。

(注) *蔑視……あなどって見下すこと。

*傲慢……いばった態度をとって人を見下すようす。

*枯渴……物が尽きてなくなる事。

*叡智……深くすぐれた知恵。

*カムイ……アイヌ語で神のこと。アイヌ民族の信仰では、動植物や自然現象などあらゆるものにカムイ(神様)が宿っているとされる。

問一

I

 から

III

 に当てはまる語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし イ なぜなら ウ しかも エ ところで オ つまり

問二 — ①「思いがけないようなことを明らかにしました」とありますが、「思いがけないようなこと」とは、どのようなことですか。

その内容として**適当でない**ものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア サケはタンパク質やカルシウムなどがつまつた「物質のカプセル」とみることができるところ、そこには窒素やリンといった海の物質も大量に含まれていたこと。

イ 引力の法則にしたがい川の上流から下流に流れた水は海にたまるが、海から蒸発した水蒸気が雨になってまた山に降り川に戻るよ
うに、地球上の水は循環していたこと。

ウ 引力の法則により海にたまり続けるしかなかった窒素やリンなど大量の海の物質が、引力の法則に逆らつて川を遡るサケによつて
上流にもたらされていたこと。

エ サケののぼる川の周囲では、サケを食べたクマの糞が森の木々を豊かに育て、その木に含まれる窒素のうち四〇パーセントは海か
らもたらされたものであつたこと。

問三

②「『サケが森林を育てる』と言われても、聞いただけでは何のことかわかりませんが、自然のしくみを理解するうえではいへん
含蓄の深いことばです」とありますが、「サケが森林を育てる」という言葉が、「含蓄が深い」と言えるのはなぜですか。その理由として
最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。なお、「含蓄が深い」とは「意味が深く味わいがある・言葉の内容が豊かで含みを
持つ」という意味です。

ア 「サケが森林を育てる」という言葉は、海のサケと山の森林のように地理的に離れているものも、地球という大きな視点では密接
に結びついていることを表しているから。

イ 「サケが森林を育てる」という言葉は、小さな存在であるサケが、森林という大きな存在の生育を担っていることを表しており、
サケの豊かな可能性を言い当てているから。

ウ 「サケが森林を育てる」という言葉は、サケ以外にも海やクマなどサケに関わる多くのものが複雑に関連し合つて森林を育ててい
るといふ、生態系の奥深さを表現しているから。

エ 「サケが森林を育てる」という言葉は、人間の行う自然保護の活動よりも生き物の本能的な行動の方が自然をあるべき姿にするに
は効果があることを暗に示しているから。

問四

③「サケの一生は、サケという魚そのものにとってもドラマチックですが、地球の生態系にとってもたいへんに奇跡的なのだ」とありますが、「サケの一生」が、地球の生態系にとって「奇跡的」だと言えるのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア サケは海で数年間過ごし続けていても、産卵の時期を迎えると、他の川と間違えることなく必ず自分のふるさとの川に帰ってくるから。
イ サケは自分の生涯を終えて死んでも、その死骸が栄養素となって川を豊かに満たすことによって、自分の子供である稚魚を育てているから。

ウ 地球と同じような星がこの宇宙に他にあったとしても、サケのように川を遡って一生を終える生物は、その星には決して存在しないから。

エ サケが自分の生まれた川に回帰するという習性をもっていたことが、地球上の大きな生態系である海と森をつなげることになったから。

問五

X

に当てはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 森の視点に立って

イ サケの側に立って

ウ 川を生き物とみなして

エ 地球を生態系とみなして

問六

④「自然に対する姿勢という面では他の多くの文化より傲慢な面がある」とありますが、「傲慢な面」とは、「ヨーロッパの人々」のどのような姿勢を指していますか。それについて述べた部分を、これ以降の本文中より十五字以上二十字以内で探し、はじめと終わりの五字をぬき出しなさい。

問七

⑤「地球が有限であることに人類が初めて気づいた」とありますが、これは、人類がどのようなことに気づいたということですか。本文中の言葉を使って四十五字以上五十五字以内で説明しなさい。

問八 ――⑥「皮肉なことに」とありますが、筆者は、どのようなことを「皮肉」と述べているのですか。その説明として最も適当なもの

次から選び、記号で答えなさい。

- ア 人類史にさまざまな恩恵おんけいをもたらした欧米おうべいの科学文明が、実は同時に地球環境を破壊はかいしていたことが明らかになったこと。
- イ 欧米人が見下していた他の少数民族の文化が、実は欧米の文化とそれほど違いのあるものではなかったこと。
- ウ 欧米人がようやくたどり着いた自然に対する姿勢や考え方が、彼らが見下していた少数民族が昔から持っていたものであったこと。
- エ 欧米人の手によって破壊されてきた地球環境は、実は欧米人が見下していた他の少数民族の手によって守られていたこと。

問九

~~~~~AからDに関して、それぞれから読み取れる「筆者の意図」の説明として**適当でない**ものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 「地球と同じような星」を想定してみることによって、地球の生態系がさまざまな幸運の重なりから成り立っており、たった一つの生物の存在がそこには欠かせないものであることを印象づけている。
- B 「レイムチェン博士」の言葉を引用することによって、サケと地球の生態系に関する自分の主張とは異なる対照的な意見を紹介し、自分の主張の正当性を読者に問いかけようとしている。
- C 「オンネ・ナイ（年取った沢）」や「ライ・ペツ（死んだ川）」といったアイヌ語を引用することによって、アイヌの人々が川などの土地もまた命あるものとみなし、自然をいたわり自然と共に生きていたことを裏付けている。
- D 「日食」の例を挙げることによって、ヨーロッパ人と他文化の人々との自然に対する姿勢の違いを明らかにし、自然を畏れ敬う後者の姿勢が科学知識を持たない未開のものと思なされていたことを印象づけている。

問十

次に示すのは、この文章を読んだ四人の生徒が会話をしている場面です。本文の内容と照らして、筆者の述べている内容と**合っていない**意見を述べている人を一人選び、それが誰か答えなさい。また、本文の内容と**合っていない**といえる理由を説明しなさい。

A 君……………「僕はこの前テレビで、北米にある『マッキンリー』という山の名前を『デナリ』に正式に変更するということニュースを見ました。マッキンリーという名前は、第二五代アメリカ大統領ウィリアム・マッキンリーにちなんでつけられたそうです。

『デナリ』の方は、アラスカの先住民族が呼んでいた名前が『偉大なもの』という意味があります。数百年も経って山の名前を変えることに、人々の自然に対する考え方の変化を感じました。」

B さん……………「私は食事の時のあいさつをきちんとするように言われたことがあります。『いただきます』という言葉には、料理を作ってくれる人や食材を提供してくれる農家や漁師さんへの感謝の気持ちが入められています。でも、実はそれだけではなく、肉や魚、野菜といった自然の恵みめぐみをもらうことに対して感謝する意味があるそうです。身近なあいさつにも昔の人の自然に対

する気持ちが現れていることに驚きました。」

C君……………「日本では昔から『山でクマに会った時には死んだふりをする』や『蜂に刺されたらおしっこをかける』といった動植物に  
関する多くの言い伝えがあります。しかし、そうした言い伝えは、科学的に根拠がない迷信だとされ、今では実践する人は  
ほとんどいないそうです。科学の知識を優先するのではなくて日本に古くから伝わる言葉を信じてもっと日常に生かすべき  
だと思いました。」

Dさん……………「宮城県の気仙沼港の漁師やカキの養殖業者の人たちは三十年位前から、川の上流にある山に植林を行っているそうです。  
彼らは川の水が流れ込む海では魚介類の育ちが良いことを経験的に知っていたようですが、実際に森の豊かな栄養分を含ん  
だ雨水が川から海に流れ込んで海を豊かにするそうです。漁師さんが美味しい魚介類を育てるために森を守るとするのは面  
白いと思いました。」

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「真<sup>しん</sup>」は中学校三年生の男の子で、祖父はイス職人であり、将来はイスのデザイナーを目指している。彼は、新しい中学に編入し、そこで友達となった「梨<sup>り</sup>々」とイスのデザインコンテストに出品するための準備をしている。真がデザインしたものを梨<sup>り</sup>々がモデラー<sup>\*</sup>として実際の大きさに立体模型を作製するという仕事分担をしていた。

梨<sup>り</sup>々はほくのスケッチを、分け始めた。

「イケそう」とか「ムリ」と言いながら、<sup>①</sup>ぱっぱと左右により分けている。

「おいおい」

ほくは梨<sup>り</sup>々の手を止める。

「それじゃほとんどボツじゃん」

「マジで、ムリだもん。真<sup>しん</sup>くんさ、センスはいいけど、製造工程とかぜんぜんわかってないんじゃない。こんなの作るとなると大変だよ」スケッチのひとつの脚<sup>あし</sup>を指さして、梨<sup>り</sup>々は言う。「ぜんぜんわかってない」という言葉がグサッと来たけど、本当のことだからしかたがない。

「どうして大変なの？」

「これさ、この細い木でやるの、強度的にムリだと思うよ。前に、あまりイスをやっていないデザイナーさんが、レストラン用のイスにこれに似た脚の図面を持ってきて、さんざんうちの職人さんともめてた。どうしてもやるなら、二重構造にして、内側にメタルのパイプを仕込<sup>しこ</sup>んで、木の部分は飾<sup>かざ</sup>りみたいにするか、もつと木を太くするか、つてね」

「木を太くするのはデザインがくずれるから、メタルのパイプを仕込んだらどう？」  
と、自分ならそうしたい願望を言ってみる。

「うん、でもデザイナーさんが選んだ木材の種類は、伸縮<sup>しんしゆく</sup>の激しい不安定な木材だね。メタルとその木材だと、伸縮率がすっごくちがうから、むずかしいの。で、木材の種類を変えなきゃいけない。ところがなかなかイメージに合うのがなくて、取り寄せになっちゃって」

「……」

ほくは梨<sup>り</sup>々を A 見つめる。

「あなどれないな、梨<sup>り</sup>々つて」

彼女は得意げな顔をした。

「あたりまえじゃん。これでも十歳<sup>じゅうさい</sup>のころから工場に出入りしてて、中学一年から設計、木工、鉄工、布張りの全工程で修業してるんだか

ら。みんなは遊びだと思ってるらしいけど、わたしは本気だもん。今は中学生っていうと子ども扱(あつか)いだけど、おじいちゃんは十五歳で本格的にイス制作の工場に弟子入りして、十八歳で一人前の職人になって、三十歳で海外に修業に行ったんだ。わたしもうすぐ十五歳だからね。<sup>②</sup>ほんとは学校なんか行ってる場合じゃないわけ」

「そっか」

梨々の勢いに圧倒されたぼくは、そっか、しか言えない。情けないな。

「で、真のアイディアはわかったけど、まだ形になってないって感じだよ。これじゃモデラー<sup>\*</sup>としては、先に進めない」

「うん。そうだね。じっくりアイディアを煮詰める」

<sup>③</sup>「じっくり……ね。でも言わせてもらおうけど」

梨々はいつになく、きつい口調だ。

「もう四月の下旬だよ。七月上旬には、<sup>\*</sup>原寸模型を写真に撮って、プレゼンパネルを作って、提出しなきゃならないんだよ。その予選を通過できてはじめて、実物を搬入して最終選考。だから、<sup>\*</sup>プレゼンパネルだって、時間かけてちゃんと作らないといけないでしょ。ってことは、原寸模型完成させるまでに、あと二か月ちよいしかないわけ」

「うん、知ってる」

「でもデザインがしつかりできてないと、実物大どころか、<sup>\*</sup>五分の一模型さえも作れない。一回作ってそれで終わりじゃないんだよ。それから何度もデザイン修正、原寸模型修正、すわってみる、デザイン修正、原寸模型修正、すわってみる、のくり返しなんだよ。早くデザインを終わらせてくれないと、間に合わないよ。わたし、プロのモデラー<sup>\*</sup>みたいに

B 作れないからね」

「……うん、わかってる。ごめん」

「あやまんなくていいからさ。デザイン、ちゃんとやってよ。テストの勉強ばかりやって、プロジェクトのほう、ぜんぜん進めてなかったんでしょ」

カチンと来た。

「テスト期間中だって、いちおうデザインは考えてたよ」

ウソだ。十日間、なにも考えなかった。手だけはスケッチをしていたけど、ただ鉛筆を走らせていただけで、じつはまったく考えていなかった。

「もつとデザインに集中してよ。時間がないんだから。あと、図面はまず五分の一模型用に描いてね」  
なんだか、怒られているみたいで気に入らない。

「たしかに模型を作るのも大変だろうけど、最初のデザイン段階は、もっと重要なんだよ。これはデザインのコンペなんだ。デザインにこそ時間をかけないと。ただ木を削って組み立てるのは時間どおりに進められるだろうけど、デザインはちがう。何時間コツコツやったら必ずできるってもんじゃないんだよ。手じゃなくて、頭を使うんだからさ」

「なにそれ」

急に梨々が立ち上がった。

「なんか、上から目線じゃん？」

「え？」

「デザイナーが上で、モデラーが下みたいな言い方じゃん」

「そんなこと言っていないよ。ただ、デザインはアイデアを出す仕事だから、一日何時間やったら必ず成果が見える手作業とはちがうって話」  
「どうせこっちはブルーカラーだよ！ 真みたいに頭も良くないしね。わたし帰る！」

「な、なんだよ急に」

梨々はバッグにノートやペンケースを詰めて、ジャケットをはおった。

「おい、ちょっと待てよ」

引き留めるのも聞かずに、梨々は C 歩いてじいちゃんに頭を下げると、さっさと帰ってしまった。  
玄関のドアがゆつくりと閉まる。ぼくはただ、ぼーっと、それを見ていた。

だんだん、腹が立ってきた。

「なんだよ、あいつ。結局女ってヒステリーだよな。ふざけんなよ」

大きな声で文句を言うと、きびすを返す。

テレビを消したじいちゃんと、目が合った。

「真、ケンカしたのか」

「べつに。あいつが一人で怒っただけだよ。まったく気まぐれなやつさ」

「ちよつとここにすわれ」

じいちゃんが、めずらしくまじめな声を出した。

ぼくは茶の間の畳の上に、あぐらをかいた。

「なに？」

「おまえ、まさかデザイナーが上で、モデラーは下みたいに考えちゃいねえよな？」  
「え、そんなこと」

考えたことないよ、と言いたかった。けど、どこかでそんなふうに思っていたかもしれない。

ぼくがあこがれているのは建築家やデザイナーだ。モデラーじゃない。もしかして、気がつかないうちに、梨々を傷つけるようなことを言ったのだろうか。

「へっ、顔に出てらあ。頭がおまえで、梨々ちゃんは手足か？ そりゃたしかに仕事の分担上はそんなふうに考えるかもしれないねえ。ま、本物のモデラーは頭もかなり使うけどな。真、頭だけでつかなくなったって、ろくもんできねえぞ。それに、職人を怒らせるようなデザイナーに、ろくなやつはいねえんだ。一流のデザイナーは、そんな態度で職人にあたらねえよ。仕事はフィフティ・フィフティだ。どっちが上も下もねえぞ。ちゃんとあの子んち行ってあやまってこい。あんないい子、いねえぞ。まだ中学生だったのに、いろいろよく知ってらあ。ありゃ、すげえモデラーになるぞ」

「……」

④ あやまりたいような、あやまりたくないような。たしかに変なことを言ったかもしれない。けど、あんなふうに帰っちゃうなんて、大人げないだろ。十歳りきの力だって、あんなことしないぞ。

「なんだ、ふてくされてんのか。そんじゃ聞くが、おまえ一人でできんのか？」

「そりゃ、できないよ」

「だろ？ ほんとはな、イスのデザイナーってのは、模型くらい自分で作れんだよ。原寸模型まで自分で作る人もいるぞ。おまえの好きなイームズ夫妻なんか、ひとつのイスを作るのに、原寸模型を五十も百も作ったらしいぞ。おまえにそれができねえなら、あの子おなに頼たのむしかねえだろ」

「……わかってるよ」

ぼくはじいちゃんの目を見ることができない。

「いいか。よっく聞け。おまえさつき、一〇五度にしたって言ってたな。いい角度だ。軽く寄りかかるのにいいあんばいだ。⑤ 人間関係だつてそうだぞ。そりゃな、九〇度なら一人で立ってられる。けど、人間関係はそれじゃうまく行かねえんだよ。かといって、ソファや寝椅子シェイスロングみたいなごろっと寄りかかるのも、良くねえ」

「どういう意味？」

⑦ ぼくはやっと、じいちゃんの目を見た。

「つまりな、そんな具合に思いきりだれかに寄りかかると、相手が支えきれなくなっちゃう。ちよいと寄りかかる程度がいいんだ」

「……」

「でな、向こうも困ったら、こっちにちよいと寄りかかる。向こうとこっちで寄りかかり合って『人』って漢字ができてるみたいだろ。人間なんてのは、だれだってだれかに寄りかかって生きてんだよ。一人で直立してるやつなんて、いやしねえ。わかるか？ おまえは今、あの子にちよつとどころか、かなり寄りかかってんだよ。なのに、直立して一人で立ってるような顔してやがる。わかるか？」

じいちゃんの言葉を、頭の中でくり返した。ぼくはたしかに、梨々に寄りかかっているかもしれない。梨々が今抜けたら、ぼくはすぐに倒れるだろう……。

突然、すべてを理解できた気がした。

そうか、一〇五度どころじゃなくて、ぼくは思いっきり梨々に寄りかかっているんだ。しかも梨々が寄りかかってくることはない。なのに、ぼくはえらそうに、一人で直立してみたいにふるまった。職人は黙ってる的な、独裁者みたいな態度だったかもしれない。

それって、まるでオヤジそっくりじゃんか。

「……わかった」

「わかりやすい。ほれ、さつさと行けって」

(佐藤まどか『一〇五度』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注) \*モデラー……………デザイナーの描いたイメージを立体の模型にする人。

\*原寸模型……………実物と同じ大きさの模型。

\*プレゼンパネル……………発表や説明に使用するパネルボード。

\*五分の一模型……………実物の五分の一の大きさの模型。家具製作には五分の一や十二分の一など、構成検討のために様々な大きさでの模型を製作する。

\*コンペ……………コンペティションの略。設計競技。コンテスト。

\*ブルーカラー……………肉体労働者。生産、現場に従事する労働者。

\*きびすを返す……………後もどりすること。引き返すこと。

\*十歳の力……………真の弟。

問一 ———①「ぱっぱと左右により分けている」とありますが、梨々はどのような基準で、「ぼく」のスケッチをより分けているのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 実際に製造する際に、無理なく製造できるデザインかどうかという基準。

イ コンペで賞をとることができるような優れたデザインかどうかという基準。

ウ 限られた予算の中で材料費をかけずに制作できるデザインかどうかという基準。

エ 梨々の家で働いている職人の腕に見合う本格的なデザインかどうかという基準。

問二 

|   |
|---|
| A |
|---|

 から 

|   |
|---|
| C |
|---|

 に当てはまる語句を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア ずんずん      イ まじまじと      ウ ちらっと      エ ぱっぱと      オ グズグズと      カ そっと

問三 ———②「ほんととは学校なんか行ってる場合じゃないわけ」とありますが、この言葉から読み取れる梨々の心情の説明として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 早く祖父に弟子入りたいという夢があるのに、それを許してもらえないことへのあせり。

イ 将来優秀なイス職人になるために全力で修業に打ち込みたいのに、それができないことへのあせり。

ウ 中学生で弟子入りしていた祖父にならって今すぐにでも中学を辞めたいのに、それができないことへのあせり。

エ 早く一人前になって、海外で修業したいという夢があるのに、それを実現できないことへのあせり。

問四 ———③「じっくり……ね。でも言わせてもらおうけど」とありますが、この言葉から読み取れる梨々の心情の説明として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 真にあえて厳しいことを言うことで、落ち込んでいた真の気持ちを奮い立たせ、デザインに向かわせようという気持ち。

イ 真に模型を作るまでにかかる時間や製造行程を十分に意識している様子がなく、真がのんびり構えていることにいらだつ気持ち。

ウ 真がデザインを考えることよりもテストを優先したあげく、いいかげんなデザインを持つてきたことを腹立たしく思う気持ち。

エ 時間をかければいいデザインができるのではなく、デザインにはいいアイデアが必要だということをも真に伝えようとする気持ち。

問五 ——— ④「あやまりたいような、あやまりたくないような」とありますが、この時のぼくの気持ちの説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 梨々を見下すような発言をしていたことを祖父の指摘しつてきで気づき、あやまろうとは思うものの、梨々が勝手に感情的になり言いたいことだけ言って帰ったことに対して不満を消せない気持ち。

イ 梨々を見下すような言葉を言ってしまったことは反省しているが、一方で役割には上下のあることが事実だからあやまりたくないと思いい、二つの気持ちの間でゆれている気持ち。

ウ コンペには梨々の力なくしては参加できないからあやまるしかないのだが、幼稚ようちな態度をとった梨々に頭を下げることにプライドが許さないという反発する気持ち。

エ 梨々の言い分をじいちゃんの言葉で理解し、自分の未熟さを十分に納得したが、強く出た以上は引くに引けなく、自分だけがあやまるにはなんとなくわだかまりの残る気持ち。

問六 ——— ⑤「あんばい」について、このことばを使った例文として適当あてあでないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私のチームが優勝するあんばいはほとんどない。

イ 魚の煮につけの味付けはあんばいが難しい。

ウ 天気のおんばいを見て、明日の予定を調整する。

エ このところ祖父の腰こしのあんばいがよくない。

問七 ——— ⑥「人間関係だってそうだぞ」とありますが、じいちゃんは人間関係について真にどのようなことを言いたいのですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問八 ——— ⑦「じいちゃん目を見た」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 梨々のことを思いやり、大事にする一方で、自分のことは理解してくれない祖父に対して怒りの気持ちいかが隠かくせなかったから。

イ 祖父の言うことに納得はできないが、職人の世界では年長者の言うことは絶対なので、仕方がなく話を聞こうと思ったから。

ウ 耳の痛いことを言う祖父に対して素直になれずにいたが、祖父の語る話にはっとして、その真意を確認したくなったから。

エ 祖父が梨々よりも自分のことを大事に思ってくれていることを感じつつも、それをすぐには信じることはできなかったから。

問九

本文の内容と表現の特徴の説明として、**適当でない**ものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「イケそう」「ムリ」などカタカナ表記にすることで、中学生の語感を生き生きと表現している。
- イ ぼくの視点から書かれた物語であり、「ぼく」の「梨々」や「祖父」に対する心情が具体的に記述されている。
- ウ 擬態語や擬音語を多く用いることで、「ぼく」と「梨々」の心のすれ違いを印象的に描いている。
- エ 「……」を用いることで、そこに「ぼく」のためらいや葛藤などの心の動きがあることを暗に示している。

三 次の①～⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨～⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① オンコ知新を信条に歴史を学ぶ。
- ② 運動会は紅組にグンバイがあがった。
- ③ 海辺でシオカゼにあたる。
- ④ カソウ行列に参加する。
- ⑤ カンバンに営業時間を表示する。
- ⑥ 難民をキュウサイする。
- ⑦ セイイを尽くして、相手にあやまる。
- ⑧ この校舎には生徒の思い出がキザまれている。
- ⑨ 犯人を説得して、連行する。
- ⑩ いかなる事由も認めません。
- ⑪ 彼はなんでも率直にいう人物だ。
- ⑫ 支度が出来たら出発しよう。



